楽しい仲間たち
筑後アンツ

監督：田中浩二
会長：渡邉　誠

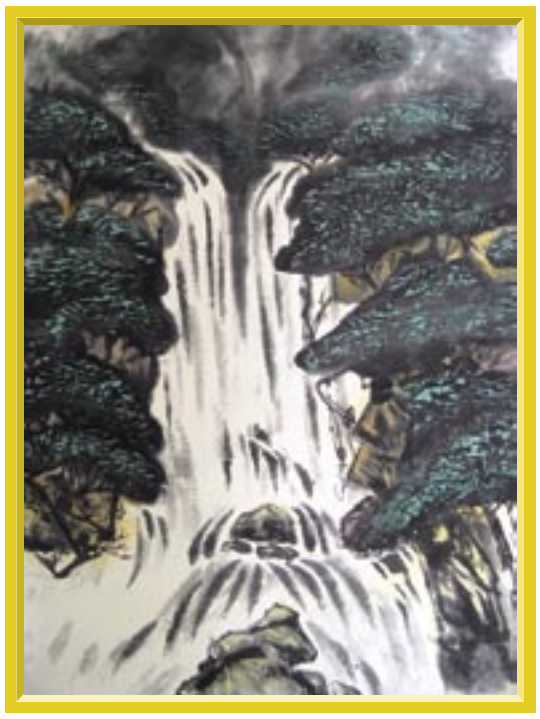
試合に勝つためには、練習が何より大切、子どもたちに練習の大切さを学んでほしいと考えています。長い時間一緒にいると、子どもたちの間でも縦・横のつながりが深まり、コミュニケーション能力、集中力、協力する大切さなどが自然に育まれているようです。

近年、少子化や様々な原因で、子ども同士の仲間意識が希薄になり、学校生活だけではなかなか身につかないのがコミュニケーション能力です。
アンツで育った子どもたちは、それぞれの個性を認め合いながら、ひとつにまとまる事が出来ているように思います。子どもたちは活き活きと練習に励みます。
練習ですぐに上達する子、時間のかかる子など、年齢や体力、個性によって様々ですが、野球が好きで、練習に励む子になるように指導しています。

どんなに能力があっても、練習に全く出ない子を試合だけ出すということはしません。そして、練習には熱心だけれど上達するのに時間がかかる子にもチャンスを与えるという方針です。練習時には、「挨拶・全力疾走」を基本に、厳しく指導しています。
アンツの全ての子どもたちに野球の楽しさや勝つ喜び、そして、健全な成長を育むことを目的として活動していますが、子どもの育成には、どうしても父兄の協力も不可欠です。

父母会と指導者が緊密な連携や意見交換をおこないアンツの子どもたちが目標に向かって頑張れるよう、少年野球の精神にのっとってサポートしています。

チーム名アンツ(ant＝アリ)は、小さなアリでも力を合わせれば象（強い相手）でも倒すという意味を込めています。



八女市柳島
郷田美根子

主人と二人暮らしになり、古希も越えましたので、老人大学の水墨画教室に入会しました。
日展を時々観に行き、絵は鑑賞するものと思っていました。しかし、自分が描くとなると、葉一枚でも、墨の濃淡、ぼかし、にじみ、運筆等に苦労します。
今度は、よく描けたと、一人悦に入り、教室に持って行き、友達の作品と見比べますと、自分の力の無さに、がっくりすることばかりです。
水墨画を習い始めて、十数年になり、苦労の連続ですが、少しは成就感を味わえるようになりました。
主人も逝き一人暮らしとなり、諸事多忙な日々を送っていますが、月二回の教室で、皆さんと会い、絵を見せ合い、楽しく談笑するひと時が今の生き甲斐です。

釣り　思いもよらぬ出来事
（K氏の悲劇）

梅雨空のなかに、一人嘆き悲しむ男がいた。永年の釣友K氏である。水温も上がり待ちに待った底物シーズンが到来、しかし、彼は怪我をして三度の飯より好きな「釣り」へ行けずに悶々とした日を過しているという。先日、一夜、見舞いがてらにとある小料理屋でその経緯を聞くこととなった。
GWの終盤に、屋久島近くの磯で遠征釣りを満喫していたが、最終日（５月６日）迄の食料や釣り餌など準備万端で、釣果以外は予定通りに進んでいたのだが、彼のもう一つの特技である行政区の壮年ソフトボール試合で県大会出場まであと一息というところまで勝ち進んだため、どうしても出場してくれとの連絡が入った。近所付き合いを考慮した彼は、後ろ髪を引かれながらも（笑）、一日早く釣りを切り上げ翌日の試合に出場した。期待通りの好プレーをしたのだが、話はそこから急展開、ファインプレーと引き換えに肩の骨を折る重傷を負ってしまった…（涙）。季節は石鯛釣りの真っ盛り、釣りに行けない彼を思うと気の毒で、少しだが同情してしまう。
全てに一生懸命頑張り過ぎた彼の早期復帰を願うばかりである。
何事にも予期せぬことがあり万事順風満帆といかぬのが人生！
人の振り見て我が振り直せということか？…。　**磯の旅人**

矢部川源流・杣の里の四季 ⑫
ヤマアジサイ（山紫陽花）［ユキノシタ科］

別名サワアジサイともいうが、矢部では釈迦・御前岳周辺のブナ林の広葉樹林の谷あいに多く見かける。初夏の登山では、容易に出会える植物である。葉は対生し、長さ10～15cm。花は６月から７月にかけて咲き、周辺に３，４枚の花弁状の萼を持つ装飾花をもち、中心部に多数の普通花がある。花の色は青色が一番多いが、紫色、白色帯びたものもあり、ときにはには鮮やかなピンク色を帯びるものも見かける。園芸用のアジサイと違い、花は小型であるが可憐な趣が実に素晴らしい。

黒木町　**松尾　重根**

呟き　母性は感性

子どもの「子」は、終了の「了」に一から始めると書き、過去から未来へ繋げる意味だと、慈明院の明海和尚は説いた。息子達が既に成人した私には、嵐のような子育ての時間は過ぎてしまったが、それでもいじめに交通事故、連れ去り等、子どもに纏わる事件には心が激しく痛む。子どもは守れるのか。

『朝に見て昼には呼びて夜は触れ確かめをらねば子は消ゆるもの』と詠んだのは、歌人河野裕子であった。わが子を案じて、悩み抜き、迷う。母親とは祈る人に他ならない。母性は感性だと私は思う。社会の異変を、更には子どもの変化を母性という感性が見逃さず、掬いとり、そしてしっかり抱きしめる。母親の喜怒哀楽は、子どもに驚くほど生き写しとなり、人格形成の礎となる。

私が幼い頃の習い事といえば、習字にそろばんが主流の時代で、友人のほとんどがその塾に通っていた。そんな中で、私の母親が私に習わせたのは絵画とピアノで、絵画は小学校六年間、ピアノは高校までの十二年間続けた。「知識は勉強すれば後から付いてくる。豊な感性は少しでも早い時期から身に付けさせる」それが母の信念だった。私の中の母性や感情がどう育ってゆき、私の息子達の現在がどうあるのか、確信は持てない。唯、空の青さと風の向きなら、容易に判断できる。**蓉子**